

昨年十一月十一日。夕方六

時を過ぎて周囲の木々は暗闇の中に沈み、日中の暑さがようやく和らいできました。島の小さな小学校の教室にLEDライトの柔らかな光がともった時、その場に居合わせた皆が歓声を上げました。

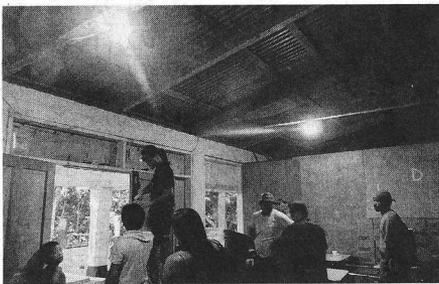
ここはミクロナシア連邦チューク州のシス島。島民二百人ほどにある小学校は集会場

東北復興日記

まだまだ



▶▶ 205



いわきおてんとSUN
企業組合代表

吉田恵美子さん



震災で気付きともった光

を兼ねています。本島のウェノ島から送電する設備はなく、明かりは経済的に余裕がある家庭が自家発電でともすしかありません。この小学校に明かりをともしたのは、福島の子どもたちがハンダゴテ

で作成したソーラーパネルが生み出す電気でした。「福島からの希望の明かりプロジェクト」と名付けた取り組みが実現したのです。写真。

東日本大震災で被災した福島の子どもたちに、原発に頼らず自然の力で必要な電気を生み出せる体験を提供したと、一昨年から福島県内の

小学校などで開いてきた自然エネルギー教室。そこで出来上がったパネルを「震災の時の恩返しに、本当に必要な地域に贈りたい」と声を上げたのは、子どもたち自身でした。

プロジェクトでは、シス島のほか、もうひとつの離島と本島にあるザビエル高校で、計五校のソーラーパネルを設置しました。いずれも、福島から出向いた技術スタッフ

が、ソーラー発電の仕組みや保守管理の方法を島民や高校生に指導し、長く使える体制を整えようと努めました。特

にザビエル高校では、地域のリーダーを目指す若者たちに技術を伝えることで、彼らの手でいつの日か離島に明かりをともせるように、との思いで指導しました。

震災の体験は地域に大きな混乱と痛みを与えます。一方で、その体験がなければ気付かなかったこと、変えられなかったこと、出会えなかった人、学べなかったことも多い。福島の子を次世代にも、遠く離れた人々にも伝えていくことが私たちの責務かもしれません。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。